



TITLE:

京大広報 No. 310

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 310. 京大広報 1986, 310: 77-90

ISSUE DATE:

1986-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209372>

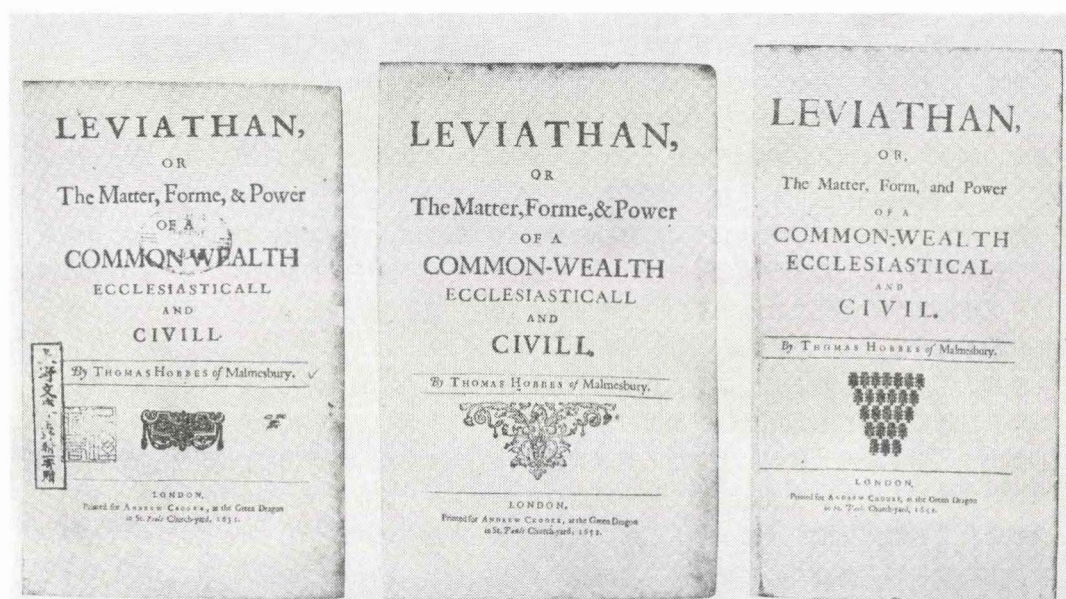
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 310

京都大学広報委員会



貴重書文庫の一部（経済学部図書室蔵） 一関連記事本文87ページ  
 （トマス・ホブズの主著『リヴァイアサン』の初版（1651年）本の3種。）  
 （タイトル，ページの図柄がいずれも異っている。（上野文庫の一部））

## 目 次

学部入学式における総長のことば	吉田寮の在寮期限に関連して……………86
総長 西島 安則…………78	<紹介>
大学院入学式における総長のことば	経済学部の「貴重書文庫」……………87
総長 西島 安則…………80	<保健コーナー>
名誉教授称号授与式……………83	“健忘症”のこと……………88
昭和61年度学部入学式……………84	<随想>
昭和61年度大学院入学式……………84	独訳「日本文化史序説」の顛末
昭和61年度医療技術短期大学部入学式……………84	名誉教授 若林 光夫…………89
部局長の交替等……………84	日 誌……………90
昭和60年度京都大学創立七十周年	計 報……………90
記念後援会助成金交付者……………84	

## 学部入学式における総長のことば

総 長 西 島 安 則

入学生諸君、おめでとうございます。

本日ここに、名誉教授の方々の御臨席を仰ぎ、各部局長、教職員の列席のもとに、昭和61年度学部入学式を挙行し、2,705名の潑刺とした諸君を迎えることができたことは、京都大学の大きな喜びであります。

諸君は、京都大学に学ぶことを志し、これまで努力を重ねて、めでたく本学の一回生となりました。今、いよいよ始まる京都大学学生としての生活に、大きな希望に燃えていることと思います。これは諸君の勉学の意欲によるものでありますが、それとともに今日の日を心待ちにして、諸君の勉学を支えられた、御家族、諸君を教え導かれた先生方、いつも励ましてくれた友人、周りの方々に、諸君と共にここであらためて心からのお礼を申し上げたいと思います。

諸君が京大生として、晴れてくぐられた時計台前の正門は、明治26年（1893年）旧第三高等中学校の表門として建てられたもので、その後明治30年（1897年）京都大学が創立されたとき譲り受けて本学の正門となりました。この90年の間、この正門は諸君のような英才を年々迎えてきたのです。

京都大学が学問の府として創立された明治30年は、多くの学問分野でたいへん大事な時期でした。19世紀が終わり、20世紀が始まろうとしている時、ヨーロッパにおいても、高等教育のあり方や、学術研究の体制に大きな改革が進められていました。わが国では近代化のための指導者養成機関として設置されていた唯一の国立大学であった東京大学に対して、清新な学術の発展を促し、真に学問をする大学として、京都の地に京都大学が開学しました。このことは、我が国の学術の発展のためにたいへん意義深いことでした。以来、この90年間に京都大学は世界的に著名な大学として発展しました。これには、日本の文化の伝統の中心としての京都のまちの雰囲気、また、京都大学に学ぶ我々に対する京都の人々の親愛の気持ちに負うところが大きいことも、忘れてはならないことです。

京都大学の独自の学風といわれている味わいは、やがて100年を迎えようとしている本学の伝統の中で培われ、熟成してきたものですが、その基本的な性格は、本学が生まれた時にすでに打ち出されていたのです。明治30年本学の開学式に当たって、木下廣次初代総長は、「大学生は自重自敬、自主独立を期すべく、従って指導に当たっては、細大注入主義は採らぬところであり、自発自得の誘導に努めたい。」と訓示されました。京都大学では、入学生を、学問を志し、自ら学ぶ意欲を持った人物として迎え、知識を詰め込む教育はせずに、自分で学び進むことを期待し、そのように導こうということで、その精神は今日の京都大学にも生き活きと受け継がれております。「自発自得」とは、自ら基礎学力を磨き、学問に対する姿勢を正し、謙虚に思索し、お互いに個人を尊重するとともに、共に学問をすることの喜びを分かち合うことです。これが今日まで厳しい時代の変遷の中で、京都大学が学問の自由、大学の自治を堅持して、大きな学術的成果をあげるとともに、すばらしい幾多の人材を送り出してきた基礎であります。

最近、76年ぶりのハレーすい星の再来が、世界中の人々の関心を集めています。このハレー



すい星の名前になっている天文学者 Edmund Halley (1656年～1742年) は、このすい星の周期を予測した天文学者ですが、その研究の展開に大きなきっかけとなったのは、ハレーが28歳の時、すなわち1684年に Isaac Newton (1642年～1727年) と出会ったことでした。

ハレーはニュートンに、かねてから考えあぐんでいた、天体間に作用する引力と、天体の軌道の関係について教えを請いました。ニュートンは、そのことについては、それから十何年も前に、ケンブリッジから田舎へ帰っていた時 (1666年) に計算した話をして、明確に答えたのです。ハレーはそれを聞いて驚嘆し、ニュートンに是非その偉大な計算を書き上げて本にするようにと勧めたのです。3年後の1687年に自然科学の歴史の中で最も偉大な業績の一つといわれるニュートンの『自然哲学の数学的原理』 (*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*) が出版されました。

そして一方ハレーは、天空のアウトローともいえるすい星に、ニュートンに教えられた軌道の計算が合うかどうか興味を持ち、これまでの記録を調査して、1682年のすい星が、75～76年の周期であることを見出し、次は1758年に来ることを予言した本を1705年に書き著しました。もし彼が102歳まで生きていれば、自分の予言を確かめられたのですが、残念ながら85歳で亡くなりました。このすい星は予言どおり、1758年に来て、それから1835年、1910年そして今度の1986年に地球を訪れているのです。

20歳代のハレーがニュートンに出会ったこと、それから学問をすることの喜びを分かち合ってきた彼らの友情のこと、更に、人類の学問的遺産の継承がどんなに尊いものかということ、を、ハレーすい星を見て、しみじみと感じます。

諸君は入学すると、まず、教養部で勉学をします。そこでは各自の志望する専門分野を超えた多くの友達に出会います。Liberal Arts という考え方に基づく教育課程の在り方は、戦後導入された新しい試みでしたが、その重要さが、この30年を経て今あらためて見直されています。最近、学問における総合ということが、よく議論されています。時にはこれはすでにでき上がった専門分野を、新しい視点から総合することを意味しますが、学問の本当の発展につながる総合は、人と人との出会いから始まる一人一人の思索の中に起こす刺激に基づくものであると思います。

諸君は京都大学へ入って、新しい環境の中で、ある種のとまどいを感じるかもしれません。先ほど「自発自得」ということを述べましたが、それでは何に打ちこんだらよいのか、すぐには



つかめないかもしれません。それでよいのです。教養部には人文科学・社会科学・自然科学のさまざまな分野について興味をもち、またさまざまな志を抱いた友人達が集まります。ちょうど諸君の年頃の時に、これほど広い分野で学問に志した者が出会うことは、誠に得難い、人生に二度とない機会です。それぞれがお互いの個性を尊重し、自由に開かれた思索を行い、純粋な喜びを分かち合えるときです。すばらしい開放感の中に、一生語り合える友人との出会いを期待します。

この、一生で二度と来ない恵まれた時期を、充実感をもって過ごせるために諸君に「稚心を去れ」という言葉を贈りたいと思います。大学は決してレジャーランドではありません。自分を磨いて、自分の歩むべき道をしっかりとつかんでください。学ぶことの喜びは、決してたやすくつかまえられるものではありません。要領よく表面を滑っていくよりは、与えられたこの機会に何かを深く掘り下げてみることを心がけてください。一つのことに到達するために、ものごとを要領よく行うことのみを考えて進むと、結局、大事な一生から多くの時を失うことになります。今日ここで、充実した日々を送る覚悟をしっかりと心に決めてほしいと思います。

今日は、諸君の京都大学の入学に当たり、ハレーすい星に例をとって学問の継承というものを考えてみました。ハレーすい星が次に帰ってくるのは2061年です。たぶんその時は、諸君はたくさんの子供や孫達に囲まれて、ハレーすい星に再会しているでしょう。その時に、京都大学の入学式は、ハレーすい星が来た年であったことを思い出し、そして自分の一生を顧みて本当に充実したものであったといえるようになってほしいと思います。

諸君の京都大学における毎日が、諸君の一生にとってかけがえのない時であり、この時が本当に充実したものになるよう、心から祈っております。これから諸君と共に京都大学がますます立派な学問の府として発展するように、力を合わせて進みましょう。

おめでとうございます。諸君を心から歓迎します。

## 大学院入学式における総長のことば

総 長 西 島 安 則

本日ここに、名誉教授の方々の御臨席を仰ぎ、部局長並びに教職員の列席のもとに、昭和61年度大学院入学式を挙行し、修士課程1,041名、博士後期課程206名、合計1,247名の諸君を迎えますことは、京都大学にとって誠に大きな慶びであります。なお、博士後期課程への進学者は、昭和61年度は300人ありますので、今年度新たに博士後期課程に入学、あるいは進学する諸君の合計は506名になります。

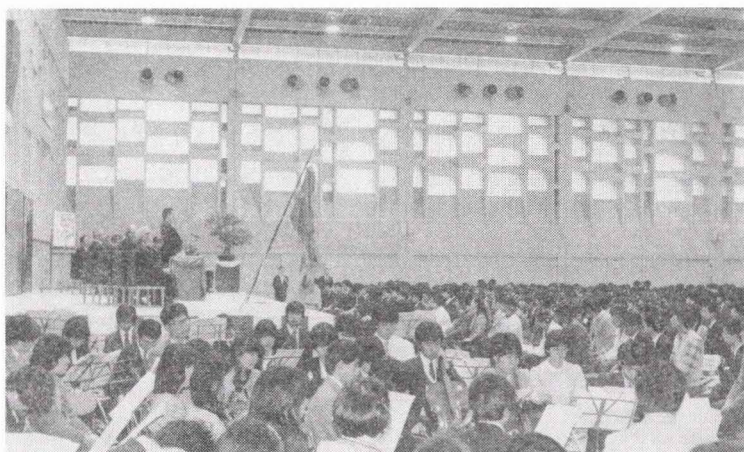
諸君はこれから、諸君がそれぞれ選んだ専門分野の研究科において、京都大学大学院学生としてさらに研鑽を積み、研究を深めるわけです。諸君が希望する学問の道を進むことができるのは、もちろん、諸君がこれまでに培ってきた学力と弛まぬ努力、そして何よりも学問に対する強い意欲によるものであります。しかし、それとともに、諸君がこの大学院へ入学、あるいは進学できたのは、御家族はじめ諸君の周囲の方々の深い御理解によることを、改めて心せねばならないと思います。

京都大学は、これまでに、旧制の時代に9,651人に博士の学位を授与しました。そして、新



制になって課程博士3,528人,論文博士5,930人,合わせて9,458人に博士の学位を,また21,925人に修士の学位を授与いたしました。

大学院は高等教育の最終にして最高の教育課程であり,それとともに,学術文化の高度の研究機関でもあります。大学院がもつこの



教育機能と研究機能の二重性の意義は,誠に重要なものであります。

国際的に非常に高い評価を受けている輝かしい研究成果を挙げてきた本学の活力の源泉として,大学院における高い水準の教育研究活動が大変大きな役割を果たしていることは言うまでもありません。今日までの先輩諸氏の御努力に,我々は感謝せねばならないと思います。

この機会に,教育と研究の一体性について少し考えてみたいと思います。ちょうど京都大学が創設されます19世紀の末頃には,ヨーロッパにおいては大学における教育と研究は一体化されるべきものであるという考え方が,学問の世界では,ほぼ全面的に受け入れられていたようです。しかしながら,具体的にこの教育と研究とを一体化するには,多くの深刻な困難がありました。

Joseph Ben-David『学問の府』(“Centers of Learning” 天城勲訳)によれば,その頃,研究はますます専門化して,研究者の養成と高度な研究を職業人の養成の副産物として行うことは,もはや不可能でした。また,逆に専門職につく人々の養成を基礎的な研究を行ったり教えたりする片手間に行うことも,もはや不可能でした。

教育と研究が一体であるのが望ましいという考えにもかかわらず,実際には多くの分野で,いろいろな問題が出てきました。そして,20世紀の初めのころには教育に直接関係しない専門の研究機関がヨーロッパに多く設置され,すばらしい成果を挙げ,特に自然科学の分野では,教育と研究を分離する傾向が強くなりました。

その後,アメリカで,教育と研究の一体化の新しい形態として大学院が生まれました。これはドイツ,イギリス,フランスなどの伝統が新しい形で発展したのですが,いわゆる国家のためのエリート養成を目的とした教育機関でもなく,また,研究を志す学者とその弟子のための象牙の塔でもないのです。特に戦後,この考え方は,わが国の新しい教育制度による大学院の形成に大きな影響を及ぼしました。しかし今日までの30年間の大学院制度の発展の中で,わが国の大学院は独特の道を歩んできたと思います。

ヨーロッパやアメリカの大学・研究所と比べてわが国の教育と研究の一体化の内容における大きな特色は,日本の伝統的な師弟の人間関係がこの新しい大学院制度による教育と研究の統合に独特の深さと強さをもたらしていることです。世代をこえた研究者の親密な関係は,現代の社会においてもたいへん重要な要素となっています。長い間,高等教育の理想として考えられてきたことが,京都大学の大学院において独自の具体的な姿に成熟しつつあることはまことに喜ばしいことです。

諸君は,この大学院へ入学されました。ここでは研究そのものが課程として教育と不可分な

ものとなっています。研究において最も大切なことは、常に基礎を掘り下げる真摯で謙虚な学問姿勢です。そして、その上にたった自由な発想、大きく羽ばたく知的な勇気です。自分の考えの広がり思いきり打ち出して指導教官や先輩と論議して下さい。権威に縛られたり、流行に流されるのは、研究を進める上で最も避けねばならぬことです。自分の目で研究すべきことを見つけることが大事です。今日の社会の風潮の中で、諸君もつい研究の流行が気になることがあるのは理解できますが、いつも自らの気持ちを引き締めて、特に若い時は大きな渦の出発点となるような研究を自らこつこつ始める気概を持って下さい。

諸君は、研究室に入り研究しますが、そこで、指導教官はじめ同僚たちと研究の喜びを素直に分ち合うことを心がけて下さい。これが、大学が学問の府としてしっかりと成り立つための基本的な力です。大学の活力の源泉は諸君にあると私は確信し、期待しております。

諸君もよく知っているようにオックスフォード大学とケンブリッジ大学は長い間、英国の高等教育機関の中心的な役割を果たしてきました。京都大学も、やがて100年を迎えますが、この両大学の歴史は、12世紀にまでさかのぼります。両大学が今日の基盤を築いたのは、13世紀の中頃からと聞いております。大学が、長い歴史を伝統として維持しうるのは、非常に尊いことです。伝統は継承され、そして常に新しい学問的活力がその伝統に注入されねばならないのです。ケンブリッジ大学の伝統の継承ということについて、大変興味のある面白いことを読んだことがありますので、この機会にお話ししたいと思います。

ケンブリッジ大学は、Isaac Newton (1642年～1727年)の偉大なる業績を誇りとして、それを教育研究の柱にしておりました。ニュートンの書いた“*Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*”は1687年に出版されましたが、これは人類の自然科学の歴史の中で最も偉大な出版物とも言えるものです。しかし、学問の宿命は、そして研究機関のもつ使命は、常にその偉大なる先達を超えていってこそ、その伝統が継承されるのです。偉大なる先輩を祭り上げている間は、その大学の活力はむしろ減衰していくのです。ケンブリッジでは、ニュートンの原書を一所懸命に読み、その学問の真髄に触れようと努力しました。大学の教育課程も自然科学では、それを中心に組まれ、誇りにして勉強しましたが、過去の栄光があまりにも輝かしいので、長い間に次第に学問の進歩を担うという面では、むしろその力を弱めていった時代がありました。19世紀のはじめ、こうした中で3人の学生がケンブリッジのキャンパスで出会いました。その3人は、John Herschel (1792年～1871年)、Charles Babbage (1792年～1871年)そして George Peacock (1791年～1858年)です。3人ともまだケンブリッジに入ったところで、皆、20歳代のはじめでした。3人はそれぞれ専門が分かれてはいましたが、いつも学問のことを、将来の夢を語り合って、たいへん仲のいい友人になりました。学校では、もちろん、大ニュートンの“*Principia*”を一所懸命勉強し、彼の科学思想の真髄を学びました。ある日、彼らは一つの誓いをたてたのです。“To do our best to leave the world wiser than we found it.”これは、この若者たちがニュートンの思想の真髄に触れ、そして単なる先輩の学問的業績の信奉者になるのではなく、この先人の業績を越えることによって、ケンブリッジ大学にその伝統にふさわしい活気のある改革をしようというものでした。

その後、彼らが創った Analytical Society of Cambridge の活躍は、やがてケンブリッジにおける数学の教育に大きな変化をもたらし、そして英国の自然科学を活性化していったのです。自然科学を専門とする諸君は、この3人の若者がその後いかに大きな仕事をしたかを知っていると思いますが、John Herschel は、天文学の新しい展開に大きく貢献すると共に、光物理学のその後の発展の最初の出発点となった Photoluminescence の発見をし、世界の新しい科学の進展の大きな渦を作った人です。Charles Babbage は今日のコンピューターの



基礎を築いた偉大なパイオニアです。百何十年も前にコンピューターの製作を試み、その計画はどんどん大きくなり、亡くなるまでに完成はしませんでした、彼のアイデアはそのまま今日に生きています。George Peacock も、数学者として立派な業績を残しました。

学問の府としての伝統は、歴史が古いということだけではないのです。大学に多くの偉大な先輩をもつということは、たいへん有難いことで、我々はそれを誇りとします。しかし、一番大事なことは、そのような偉大な先輩を生んだ大学の学問的な風土を、時代を越えて受け継いでいくことです。教育と研究の一体となったこのすばらしい京都大学の大学院に入学し、世界の学界に貢献しようと意気に燃えている諸君に、先ほどの3人の誓い、“To do our best to leave the world wiser than we found it.” という言葉を贈りたいと思います。この3人の若い学生がケンブリッジを再び立派な活気のある大学にしたことをお話しし、諸君に対する本学の大きな期待を表現したいと思いました。

京都大学の教育研究の場が一層活力に満ち、この学問の府での仕事がよりすばらしい世界を作ることにつながることを念願して、諸君を歓迎し、激励します。

.....

## ＜大学の動き＞

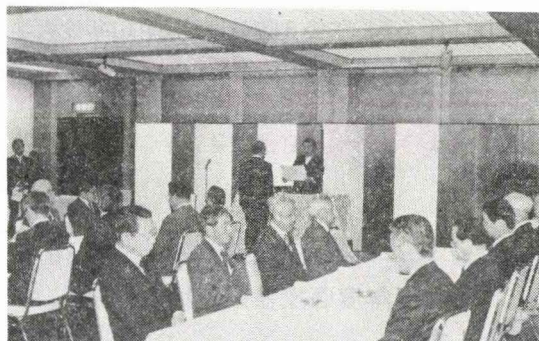
### 名誉教授称号授与式

4月5日（土）午前10時35分から、名誉教授称号授与式が、京大会館2階会議室において举行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長あいさつ」があって、午前11時10分に終了した。

称号を授与された方は次の35名である。

（敬称略）

（氏 名）	（推薦部局名）
中 島 暢太郎	（防 災 研 究 所）
降 旗 武 彦	（経 済 学 部）
大矢根 守 哉	（工 学 部）
兵 藤 知 典	（            ）
増 山    學	（教 養 部）
島 地    謙	（木 材 研 究 所）
渡 邊 信 淳	（工 学 部）
福 島 徳壽郎	（法 学 部）
西 原    宏	（工 学 部）
長 尾 義 三	（            ）
小 澤 泉 夫	（理 学 部）
北 村 李 軒	（保 健 管 理 セ ン タ ー）
高 田 利 夫	（化 学 研 究 所）
安 藤 貞 一	（工 学 部）
佐 川 弥之助	（結核胸部疾患研究所）
大 野 英 二	（経 済 学 部）
鈎    三 郎	（原子エネルギー研究所）



池 田 次 郎	（理 学 部）
柳 田 聖 山	（人 文 科 学 研 究 所）
浅 井 健次郎	（理 学 部）
水 津 一 朗	（文 学 部）
岡 田    清	（工 学 部）
苫 名    孝	（農 学 部）
花 房 秀 郎	（工 学 部）
横 田 徳 郎	（農 学 部）
河 西 三 省	（工 学 部）
半 田    肇	（医 学 部）
菊 地 泰 次	（農 学 部）
巽    友 正	（理 学 部）
大地原    豊	（文 学 部）
尾 上 久 雄	（経 済 研 究 所）
本 田 實 信	（文 学 部）
奥 田 光 郎	（教 養 部）
田 中 真 晴	（経 済 学 部）
市 川 康 夫	（結核胸部疾患研究所）



## 昭和61年度学部入学式

4月11日（金）午前10時10分から、昭和61年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」（前掲）があり、午前10時40分終了した。

今年度の新入生数は次のとおりである。

文学部200名、教育学部60名、法学部401名、経済学部238名、理学部291名、医学部120名、薬学部80名、工学部1,001名、農学部314名、計2,705名。そのほか、3年次に32名の編入者があった。

## 昭和61年度大学院入学式

4月11日（金）午後3時から、昭和61年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は学歌斉唱（京都大学音楽部交響楽団及

び京都大学合唱団が協力）に続いて、「総長のことば」（前掲）があり、午後3時35分終了した。

なお、今年度の大学院入学及び進学状況は次のとおりである。

研究科	修士課程	博士後期課程	
		入 学	進 学
文学研究科	71 名	9 名	48 名
教育学研究科	13	0	16
法学研究科	12	7	15
経済学研究科	19	3	11
理学研究科	154	9	93
医学研究科		115*	
薬学研究科	34	1	16
工学研究科	594	35	53
農学研究科	144	27	48
計	1,041	206	300

注 \*は博士課程

## 昭和61年度医療技術短期大学部入学式

医療技術短期大学部では、昭和61年度入学式を4月7日（月）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓臨席のもとに挙行した。式典は学長式辞、来賓祝辞があつて、午前10時40分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科40名、理学療法学科20名、作業療法学科20名及び専攻科助産学特別専攻20名の計180名である。

（医療技術短期大学部）

## 部 局 長 の 交 替 等

農学部附属演習林長

佐々木 功農学部附属演習林長の任期満了に伴

い、その後任として堤 利夫農学部教授（森林生態学講座担当）が4月2日任命された。任期は昭和63年4月1日までである。

体育指導センター所長

岩井信之教養部教授（保健体育担当）が4月2日体育指導センター所長に再任された。任期は昭和63年4月1日までである。

アフリカ地域研究センター長

アフリカ地域研究センターの新設に伴い、同センター長に伊谷純一郎教授（同センター湿潤帯生態系研究部門）が4月5日任命された。任期は昭和63年4月4日までである。

## 昭和60年度京都大学創立七十周年 記念後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委

員会で決定した昭和60年度助成金交付者は、第1種（海外派遣研究員）16名、第2種（海外から招へい学者）6名、第4種4名で、それぞれ次のとおりであった。

## 1. 第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査、研究のため海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当、宿泊料）を交付するもので、派遣区分は、6か月、3か月、1か月がある。

派遣区分	所 属 部 局	職 名	氏 名	主 な 派 遣 国	研 究 題 目
6か月	経 済 学 部	教 授	浅 沼 萬 里	ア メ リ カ 合 衆 国	技術革新の観点からみた企業組織と企業間関係の国際比較
〃	教 養 部	教 授	山 本 利 治	連 合 王 国	18世紀イギリス小説批評の研究
〃	結核胸部疾患 研 究 所	助 手	北 市 正 則	連 合 王 国 ア メ リ カ 合 衆 国	呼吸器病学、特に肉芽腫性肺疾患及び間質性肺疾患の病理学的研究
3か月	文 学 部	教 授	服 部 正 明	ド イ ツ 連 邦 共 和 国 オーストリア共和国 ス イ ス 連 邦 共 和 国 フ ラ ン ス 共 和 国	古典インド知識論の研究
〃	法 学 部	教 授	村 松 岐 夫	ア メ リ カ 合 衆 国	高度産業国家の政治過程の比較研究
〃	防 災 研 究 所	教 授	今 本 博 健	ア メ リ カ 合 衆 国 連 合 王 国 ド イ ツ 連 邦 共 和 国	実験水理学に関する調査研究
1か月	教 育 学 部	教 授	森 耕 一	ア メ リ カ 合 衆 国	図書館システムの行政的基盤
〃	経 済 学 部	教 授	降 旗 武 彦	連 合 王 国 フ ラ ン ス 共 和 国 ド イ ツ 連 邦 共 和 国	ヨーロッパ諸国（主としてドイツ、イギリス、フランス）の主要大学におけるアメリカ経営学の影響を解明
〃	理 学 部	助 手	成 田 吉 徳	カ ナ ダ ア メ リ カ 合 衆 国	第10回複素環化学国際会議出席及び有機金属化合物の有機合成への応用、抗腫瘍性天然有機化合物に関する研究調査のため
〃	医 学 部	教 授	星 野 一 正	フィンランド共和国 連合王国 スウェーデン デンマーク ドイツ連邦共和国 フランス共和国 カナダ	解剖学の研究調査
〃	薬 学 部	助 教 授	中 川 照 眞	連合王国 ドイツ連邦共和国 オランダ王国 スウェーデン王国	液体クロマトグラフィーの薬学への応用に関する研究調査
〃	工 学 部	教 授	江 口 彌	中 華 人 民 共 和 国	液膜法による物質の分離回収と精製に関する研究調査
〃	農 学 部	教 授	駒 野 徹	連 合 王 国 オ ラ ン ダ 王 国 フィンランド共和国	細胞分裂の分子機構並びにDNA傷害に関する研究調査
〃	教 養 部	助 教 授	松 本 澄	ア メ リ カ 合 衆 国 カ ナ ダ	新規複素環化合物の合成と反応に関する研究調査及び第10回国際複素環化学会議に出席
〃	人文科学研究所	教 授	竹 内 實	中華人民共和国 フランス共和国 ソビエト 社会主義共和国連邦	現代中国の開放政策の実態調査及び意見交換
〃	東南アジア研究 セ ン タ ー	助 手	中 川 敏	オーストラリア	東インドネシアにおける「交換」の比較研究

## 2. 第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義、研究指導等を依頼してその分野の研究発展をはかるために助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、招へい期間は、原則として1～3か月である。

受 入 部 局	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
理 学 部	Christiane Plas	フランス共和国 パリ第7大学 歯科学 研究所主任研究員	細胞生化学 ラット胎児肝細胞のインシュリン応答
薬 学 部	Abraham Patchornik	イスラエル国 ワイツマン科学 研究所 教授	高分子有機化学 高分子試薬を利用するペプチド合成法に関する研究



工 学 部	Karel Mazanec	チェコスロバキア 社会主義共和国 オストラバ工科大学 金属学部長	物理冶金 マルテンサイト強靱鋼に関する研究
教 養 部	Yves Hervouet	フランス共和国 パリ第7大学 教授 兼 コレージュ・ド・フランス 漢学高等研究所長	中国文学 李商隠詩の研究
人文科学研究所	楊 天 石	中華人民共和国 中国 社会科学院 近代史研究所 副研究員	中国近代史 国民革命の研究
木 材 研 究 所	John A. Butcher	ニュージーランド ニュージーランド 林業研究所 木材保存研究 部門長	木材保存 木材の微生物劣化機構の解明と木材保存薬剤の開発

## 3. 第4種

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張に対し、助成金を交付するものである。

所 属・職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
総 長	沢 田 敏 男	昭和 60. 5. 8～60. 5. 15	オーストラリア連邦及びニュージーランドにおける高等教育・研究機関の調査
東南アジア研究 センター 教 授	前 田 成 文	〃	〃
総 長	沢 田 敏 男	昭和 60. 8. 23～60. 8. 26	韓国における高等教育・研究機関の調査
庶 務 部 国際交流課長	奥 野 弘	〃	韓国の高等教育・研究機関における学术交流の実情調査

## 吉田寮の在寮期限に関連して

学生部長は、3月末「吉田寮の在寮期限到来にあたって」と題する文書を公表し、全学の教職員・学生の理解と協力を求めた。なお、学生部長は、下記の文書を吉田寮自治会委員長にそれぞれ送付した。

京大学厚寮第57号  
昭和61年3月1日

吉田寮自治会委員長殿

京都大学学生部長  
朝 尾 直 弘

## 吉田寮の入寮募集について

昭和61年3月31日をもって吉田寮の在寮期限が到来します。このことについては、学生部長名で従来より通知しているところであります。したがって、昭和61年度の入寮募集を行うことは出来ません。

ここに、貴自治会による入学予定者等に対する

一切の入寮募集ならびにこれに類する行為を行わないよう通知します。

京大学厚寮第65号  
昭和61年3月31日

吉田寮自治会委員長殿

京都大学学生部長  
朝 尾 直 弘

## 吉田寮からの退寮について（通知）

学生寄宿舍吉田寮における学生の在寮期限は昭和61年3月31日です。このことに関しては、昭和60年12月3日付学生部長通知及び昭和61年3月1日付学生部長通知等でお知らせしたとおりです。

ついで、昭和61年4月1日以降すみやかに退寮するよう貴自治会構成員に対し周知徹底してください。

なお、退寮する寮生に対しては、厚生課の窓口で下宿の斡旋等を行います。

（学生部）

## &lt;紹 介&gt;

## 経済学部の「貴重書文庫」

経済学部の書庫には、「上野文庫」(広報№135で紹介)、「河上文庫」(同№175)、「ビュヒャー文庫」(同№239)、「マイヤー文庫」などがあり、それぞれ多くの貴重書を蔵している。

昭和59年より書庫の一隅に「貴重書文庫」を設置し、これら各文庫ごとに保存していたもの及び一般の図書の中から、1850年までに出版された、いわゆる「貴重書」をすべて集め、まとめて保管し、読者に閲覧の便を図ることとした。

この「貴重書文庫」には、今日までに約 7,000 冊が収容されているが、その規模は文学、教育学、法学、経済学の文科系学部が所蔵する文庫の中でも最大級のものであり、おそらく全国の他の経済学部系の文庫のなかでも、一、二を争うものであろう。

昨秋、11月14日(木)～16日(土)の3日間、附属図書館展示ホールで、「貴重書文庫」創設を記念し、代表的な古典約82点を選んで、「経済学古典展示会」が開催され、それぞれの古典について、部内の教官の手で解題を付け、原則的にそれらを年代順に並べた。展示会の日程の一部を経済学会の大会と重ねたこともあって、約 400 名近い方々の閲覧に供することができた。

ここでこの「貴重書文庫」の特色の一端を記してみよう。本文庫の所蔵する書物のうち、出版の最も古い書物は、トマス・アキナスの『神学大全』Summae theologiae, Venetis, 1482 である。但し全巻の4分の1にあたる第1部だけである。1500年までに出版された書物を、一般に揺籃期本 Incunabula と呼んでいるが、このほかにもアリストテレスの『著作集』など4冊の揺籃期本を所蔵している。

珍らしい書物としては、宗教改革の口火を切ったマルティン・ルターの『商業および徴利について』Von Kauffshandlung vnd Wucher, Vuittemberg, 1524 がある。1517年10月31日にローマ教会批判をおこなったルターは、本書で商業・高利貸資本をきびしく批判した。本書はその初版

で、ビュヒャー文庫のものである。

17世紀に入ると、文献の数がきわめて多くなる。フランシス・ 베이コンをして一躍、英文学史・社会思想史上で著名ならしめた『エッセイ』の1632年版があるし、ルネ・デカルトの『方法叙説』1637(初版)(マイヤー文庫)は稀有である。トマス・ホップズ『リヴァイアサン』1651年版が、三種類もあるのは、わが国では本文庫ぐらいのものであろう。

経済学の文献が数多く登場するのも、17世紀である。本文庫に収蔵されているものの中に、イギリス重商主義の文献として著名なトマス・マン Thomas Mun の『外国貿易によるイギリスの財宝』England's treasure by forraign trade, London, 1664(初版)、ジョサイア・チャイルド Josiah Child の『貿易ならびに利子の略説』Brief observations concerning trade, and interest of money, London, 1668(初版)、ウィリアム・ベティ William Petty の『政治算術』Political Arithmetick, London, 1691(初版は1690年)がある。目をオーストリアに転じてみると、官房学の主唱者ベッヒャー, J. J. Becher の『都市および農村の興隆と衰微の本来的原因に関する政治論』Politischer Discurs von den eigentlichen Ursachen des Auf-und Abnehmens der Städte und Länder, Ffm. 1759 もみられる。その他、重商主義の文献にチャールズ・ダヴナントやジョン・ローの文献がある。

18世紀の文献としては、ジョナサン・スウィフト、バーナード・ド・マンデヴィル、ダニエル・デフォー、ジョサイア・タッカー、アーサー・ヤング、デイヴィッド・ヒューム、ヨーハン・ペーター・ジュースミルヒなどがあるが、重農主義の古典が意外に少ない。だが、その他、古典経済学の創立者アダム・スミスを中心に、シャフツベリ伯、フランシス・ハチソン、アダム・ファەرガソン、ジェームズ・スチュアート、エドモンド・バーク、トマス・ペイン、ウィリアム・ゴドウィンなど数多くの著書がそろっている。

(経済学部)



## 保健コーナー

## “健忘症”のこと

日常“物忘れ”という場合、その中味はさまざま、人や物の名前がでてこないということであったり、置き忘れであったり、人との約束を失念してしまうようなことを指すこともあれば、昨日なにをしたか、あるいは一週間まえ自分がどのようにして過ごしたかを憶いだせないというようなことであったりする。要はいろいろな意味での記憶の病理が問題となっているには違いない。とは言うものの、よく知っている物の名前が憶いだせないのと、先週自分が何をしていたかを憶いだせないのとでは、同じ記憶の障害とはいってもずいぶん異なっている。つまり、習い憶えて知識となった記憶（例えば言葉）と、その人にとって一度きりしかない時間の流れにそった体験の記憶（例えば一週間前の憶い出）とは、基本的に区別されるべきものだというのである。ふつう医学的に健忘症という場合には、あとの、体験の記憶の障害の方を指している。前者の方はふつう失語症などの症状の一部として扱われることが多い。

## △ △

健忘は前行性健忘と逆行性健忘に大別される。例えば、頭を強く打った場合、もし意識が無くなるとその間のことを憶いだせないのは当然であるが、意識が回復してからも、その後に引き続いて体験することを記憶に留めておくことができなくなることがある。これが前行性健忘である。一方、頭を打つ以前の体験も時に憶いだせなくなることがある。軽い場合にはほんの数分間のこともあるが、数時間にさかのぼって憶いだせないことや、時には、何日、何か月、何年にもわたって、記憶が失われてしまうこともある。これが逆行性健忘と呼ばれるものである。

健忘を主とする記憶障害は、広く健忘症状群あるいはコルサコフ症状群といわれ、これは、1) 前行性健忘ないし記憶力障害、2) 見当識障害（自分はなぜここにいるのか、ここはどこで、今はいつなのか、といったことが分からなくなる）3) 作話（ずっと病院にいる人に、先程までどうしていたかを尋ねると、“会社へ行ってきた”

した”と答えたりする）、という三症状からなりたっている。しかし、こうした健忘症状群は必ずしも常に三症状がしっかりそろって出現するとは限らない。ごく軽い場合には、記憶力の障害だけが目だって、見当識はだいたい保たれ、作話も生じないということもある。一方、見当識が強く障害されているのに記憶力障害は全くない、というようなことはまず起こらない。

## △ △

それでは、このような健忘症状群はどんな時に生じるのであろうか。実は、脳のほぼ中央部に記憶回路とよばれる領域のあることが、最近になってだいたい確かめられてきており、それは大脳辺縁系といわれる部位にほぼ相当するもので、以前から情動と関わりの深い部位と考えられてきた領域である。体験の記憶と喜怒哀楽といった情動とが脳のほぼ同じ部位によって支えられているというのは大変興味深いことであるが、そのことの意味はまだ十分解明されているわけではない。

健忘症状群をひき起こす主な病気としては、慢性アルコール中毒、一酸化炭素中毒、頭部外傷、脳炎（とりわけヘルペス脳炎）の後遺症などのほか、いわゆる老年痴呆やアルツハイマー病に代表される初老期痴呆などがあげられる。老年痴呆などの場合には健忘症状群を必ず伴うといっても過言ではないが、そのみが単独でみとめられるのは比較的初期のみであり、ある程度進行してゆくと、言語の障害、行為や認知の障害、一般的な知能の障害などが必ず出現してくる。記憶の障害だけが、つまり健忘症状群だけがほぼ独立に出現する代表的な病気は、アルコール中毒性のコルサコフ症状群である。

この他、一過性全健忘とよばれる病気がある。これはある一定の時間の間だけ健忘症状群に陥るもので、その間、自分がどうなったのか、何故自分は今ここにいるのかが分からなくなり、こうした状態そのものも次々と忘れ去られてゆくために、“一体どうなってるんだ”という意味のことを何度も繰り返すことになる。発作が終わると、発作の間のことを全く憶えていない。原因の多くは一過性に脳（記憶回路の一部）の血流が低下するためと考えられている。

最後に、全生活史健忘にふれておこう。これは





